

3つの定例活動

みなさまの参加を
お待ちしております



小原本陣の森
第1日曜日



知足の森
第1日曜日



相模湖・嵐山の森
第3日曜日

News Letter

NPO法人緑のダム北相模

midorinodam.jp



No.473-474

体験学校、合宿とイベントが続いた夏

【定例活動報告】知足の森

8月の知足の森の活動は臨時で嵐山の望星の森で活動を行いました。地球環境部で高校3年生になる生徒が学校の卒業論文でトチノキの調査のとりまとめに挑戦しています。これまでのデータに加え、ここで一度、これまでの取り組みをまとめて、何かしらの発表を行う、というところまで検討しています。そんな中、今回も樹高と胸高直径を測定するわけです。トチノキは3年間にわたって植樹されています。その3年間による違いはすでに学芸大学の研究紀要に投稿済みですので、今回はそれをベースにどのような施業をすれば広葉樹の育樹として妥当か、をテーマにしました。これまでの300本近いトチノキの全量調査ではどうしても誤差を生じてしまいがちな生育の悪い木がデータに混じってしまい、結果、傾向が読み取りづらくなってしまっていました。データの精度をより高めるために全量調査から10m四方の対象区3年間の植樹場所に設定し、その中

緑のダム北相模は相模原
市内で活動する森林ボラ
ンティアです。急がず、無
理せず、楽しく、休ま
ず、ボチボチと・・・。



での本数や各データを集め直し、これまでのデータと比較する活動としました。そうすると、データとしてあまり整合性がなかったりするものは現地では大きく曲がっていたり、他の木より勢いがないため、空を他のトチノキに覆われさらに生育が落ち、という精度を落としている個体が明らかになっていき、データとしてかなり信頼性が上がったと思われまます。今後はさらに精査を進め、2つのデータから形状比や成長率のデータを計算し、より効果的な、妥当な育樹方法について報告ができそうです。別欄で報告します環境教育学会での報告中に森林総研の方から3月の森林学会で報告を、ということになりそうですので、卒業論文をまとめた生徒を中心に成果を報告できれば、と考えています。

宮村 連理（本会、副理事長）



【定例活動報告】小原本陣の森



今日は小原の新基地構想を固めるため、早朝より小林宅を訪問した。川田、丸茂、石井、小林、今日は地域の本陣祭りの準備ため沢山の方が提灯を吊り下げたり道路の整備などされていた。今日も地上では32.5度と猛暑で、なにもしなくとも汗が噴き出してくる。宮村さんと栗田さんと中学生10名は嵐山の柵の木の測量並びに伐採計画作成を兼ねた草刈りを行った。森林内では29.0度と3.5度の差がある。涼しいのはスギのフィトンチッドによるものなのか判ら無いが全然涼しいのだ。我々小原班は小林氏の所有する畑に行き、新しい基地の構想について議論した。結局小屋は木の伐採と草刈りをして奥の方の歩道から目立たない場所にする事となった。

歩道と基地の周りには竹で垣根をこさえモッコウバラを植えて散歩をする方の目を楽しませる構想とし、長福寺までの歩道をバラ通り（小原だけにオバラで）に仕立てたい。新基地の自慢は、何と言っても景色にある。相模湖から延びる相模川と相模湖大橋の景観は絶景である。ここに腰かけて一服して景色を眺めたあと散歩を続けられたい。

午後から嵐山にゆき宮村さん達と合流、石井さんが収穫してくれたスイカを切って皆さんで頂いた。水分が身体に浸みてとてもうまかった。小原に設置が決まれば、運ぶ小屋の選択だが、森林整備のスチール小屋をメインにするため、まず小屋内部を空にして分解することとした。小屋内部の道具をNOVAの小屋に移す作業を行った。次回は体験学習と深沢高校のインターンシップが予定されているため、9月第1週が小屋の解体になるだろう。ともかく暑く作業が大変もたついた。

小林 照夫（本会、理事）

【定例活動報告】相模湖・嵐山の森

定例活動前日の28日土曜日は、小原地区運動場で「体験学校」が開催され、今回は地元の生徒さんたちは見えなかったが、学芸大附属小金井中学の生徒を中心に20名以上集まり、午前中は竹藪整備を行い、大竹を5~6本伐採した。3本は午後からの「そうめん流し」の樋に加工し、2本は「小原の郷」の管理人さんに頼まれたので、建物横の自販機前に運んだ。「そうめん流し」は水道も完備していたので、水はけを注意しながら企画できたので怪我もなく無事終了することができた。

定例活動当日の森林整備では、神奈川県立深沢高等学校のインターンシップ生を9名受入れ、林業への関心を持ってもらうため、理論と実践を実施した。午前中は樹木や草花の説明を行いながら嵐山登山

を行った。サッカー一部の学生は体力を余す態度であるが、そうでない学生は苦勞していたが流石は高校生で体力があり余裕で山頂に登頂した。山頂で景色を見て全体写真に収まり、下山は東海道自然歩道沿いに下り丁度12:00に嵐山基地に到着した。昼食の後はスギの間伐体験を実施した。高校生は二班に分かれ手鋸で伐採作業を行い、中学生は慣れた手つきで間伐作業を行った。杉の傾きで思った方向とは異なる側に伐倒する事態も起こったが、林業の大変さを身に染みて感じられたのか、また森林活動に個人で参加したいとする高校生もいた。猛暑が続く今年の夏の中では、両日とも比較的凌ぎやすい日和であったことに感謝。（報告：小林照夫）

今回は県の助成で行う体験学校とも並行しての活動だったので、午前中調査の続き、午後は森林整備班のお手伝い（になるかどうかは謎ですが）で間伐体験の支援をさせていただきました。午前の調査では第1日曜日の調査の結果、これまでの3つの区画で行ってきた施業の違い（間伐する、枝打ちする、何もしない）の違いのあるなしがわかってきましたので、新しいデータを取ることにしました。それは樹冠投影面積というもので、その木が枝を広げた面積を地面に落としたもので、これと区画の面積を比較し、成長量とも関連して説明しようとする目的でした。確かにいろいろな成長のトチノキがあるなかで、枝を広げられるところまで広げて成長が止まっているように見えなくもない、感触があったのでそれを根拠を持って説明できるようにする、という調査を行いました。結果は、、、、近々発表の場、でということにしますがトチノキの育樹法についてはこれで一つ説を確立できそうです。（報告：宮村 連理）



桜井尚武の 森のコラム

「フジカンゾウ (*Desmodium oldhamii*) とヌスビトハギ (*Desmodium podocarpum*)」



図1. フジカンゾウの花
20130818嵐山



図2. ヌスビトハギの果実
20180909御岳山



図3. フジカンゾウの葉と花
20130818嵐山

嵐山のスギ人工林の下草に比較的大きな薄赤紫の花をつけるマメ科の植物があります（図1）。ながい間これの名前がわかりませんでした。ある日植物図鑑をめくって、同じ図をみつけ、記載事項からもこの種で間違いないと思いました。それがフジカンゾウ、藤甘草と漢字を宛てています。

News Letter(No.469-470)のコラムのカンゾウの記事で甘草に言及しました。甘草とは漢方薬の名称で一般にはウラルカンゾウ (*Glycyrrhiza uralensis*) を乾燥させたものをいうのだそうです。日本には生育していませんしフジカンゾウとは属名も違う別物ですが、それに似ているというところからカンゾウの名前を充てたようです。フジは蔓植物のフジに葉の形が似ているということからでしょう。

嵐山の林内にはヌスビトハギが普通に生育しています。この果実が足をそばだててこっそり歩く盗人の足の形に似ていることからこの名が付いたというのが図鑑などの説明です（図2）。実際にみた人がどう思うかはわかりませんが、最初に名を付けた人は楽しんでつけたのか、苦し紛れに探し出したのか、面白いと思います。両者の違いは大きさでは前者が大きい。複葉の小



図4. ヌスビトハギの葉
20180909御岳山



図5. フジカンゾウの果実
20130818嵐山

葉が前者には5枚以上ある(図3)のに対してヌスビトハギは3枚です(図4)。果実(節果)は前者がしばしば3個以上で構成されている(図5)のに対してヌスビトハギは2個(図2)ということで区別できます。この果実にはどちらにも鉤(かぎ)毛があり、それで動物の体や人の衣服に着いて運ばれる仕組みになっています。皆さんも山から帰って衣服に着いた実を落としたことがあるでしょう。

※国内希少野生動植物種に指定されている対馬市天然記念物のツシマウラボシシジミ(*Pithecopus fulgens tsushimanus*) (蝶)の食草がヌスビトハギで、足立区立生物園でその食草を含めた保全に取り組んでいると9月11日の読売新聞朝刊で紹介されていました。

桜井 尚武 (本会、会員)

【若者の森づくり】 地球環境部

例年多くの参加がある合宿ですが、今回は5人だけでした。とても寂しかったです。ですが、人数が少ない方がやりやすいと感じました。

まず初日は、源流体験を行いました。例年は濁流に飲み込まれ叫び声が響いていますが、今回は黙々と流れに飲み込まれていく光景が繰り広げられました。また、去年より上流で行ったため、とても水温が冷たく18度でした。そのため、途中で諦めてしまう人もいましたが、半袖半ズボンの人は寒いと言いながらも濁流へ挑んでいきました



初日の夜は、鹿を探しに車で向かいました。目当ての鹿は道中五頭見かけました。他にも穴熊や子狐に出会いました。子狐は逃げるとき一度車に向かって威嚇してきたのが可愛かったです。

二日目は、林業体験を行いました。予定では、一人一本でしたが、木の枝が他の木の枝が絡み合い、1日1本になってしまいました。みんなとても苦戦していました。そしてナイトアクティビティ目的は虫観察で、その中でも来てほしいとみんなが言っていたのはカブトムシとクワガタでした。しかし来たきたのは蛾とコガネムシ、カメムシのみでした。

三日目、最終日の朝。凍てつく寒さの中、7時の放送の音で身体を起こす。この寒さは都会の生活に慣れきってしまった私たちの精神を目覚めさせてくれる。ここでの生活も最後である事を噛み締めながら支度をし朝食へ向かった。朝食を済ませたら、先月捕まえられた猪を解体した。それぞれの部位を骨からそぎ落としながら猪は一口サイズになっていった。それをみんなで敬意をはらい食べた。とても美味しく田舎の良さを感じた瞬間だった。そのあとおかみさんが焼きそば、おにぎり、とても美味しい口スカツを食べた。おいしかったあ。おかみさんからの最後さいごのご飯は、何か思いを感じた

お別れのとき。おかみさんに最後の感謝を込めありがとうございましたと言って、私達我々は去っていった。来年はもう少し人員を増やして楽しみたい。以上参加者5名からの報告でした。

参加者代表 吉留 瑞貴
(都立科学技術高校1年)

【若者の森づくり】

Forest Nova

8月11日に開催されたパタゴニア横浜・関内ストアでの積み木イベントの企画・運営に携わりました。6月に積み木や物品、そしてスタッフの確認用としてフォレストノバと緑のダムだけで1度イベントを開いていたので今回がストアでは2度目の開催となりました。夏休み期間中ということもあり地球環境部の中学生やフォレストノバの1年生も参加して前回よりもスタッフが多く、途中休憩をとりながらまわすことができました。当日は思っていたよりも来場者は少なかったですが、パタゴニアの方から「子どもを積み木で遊ばせてもらえてゆっくり買い物できた」という声を頂いたと聞いてうれしかったです。

私は5月の最初の打ち合わせから今回の本番のイベントまで関わってきて非常に得るものが多かったと感じています。パタゴニアのストアの方との話し合いの中で、自分たちの活動を紹介したりこのイベントの目的などを話したり、改めてフォレストノバや森での活動について考えさせられました。また、スペースに合う積み木の数や、敷物、パネル、そしてそれらの輸送についてなど積み木を扱うにあたっての実際の段取りも経験することができました。10月の麻布大学の大学祭では今年も積み木を使おうと考えているので、自分たちで企画していく参考にしようと思いました。1年生にも次は企画の段階からも関わってもらい、徐々に引継ぎをしていきたいと思っています。

服部 七星 (Forest Nova)

僕はパタゴニアの横浜店で相模湖周辺の森林を管理する際に切った木で作られた積み木を通して、いろいろな人に我々が行っている活動を知ってもらうという活動をしました。パタゴニア横浜店には子連れのお客さんが来るためそのお子様を積み木コーナーでお預かりし、その保護者の方にFacebookやチラシを見てもらう様々な工夫をしました。例えばFacebookを閲覧してくれた方に木屑から作った天然の消臭剤を渡したり、積み木コーナーの近くに活動内容を描いたポスターを掲示するなどです。結果的には子供達は楽しく遊んでくれましたが大人の方からはあまり関心がなかったように感じました。次からは子どもたちの相手と大人への説明を明確に分担していけばより多くの人に知ってもらえると思いました。

鈴木 千丸 (東京学芸大学附属小金井中学2年)

【環境教育学会にて報告】

8月25日26日の2日間、東京学芸大学で行われた環境教育学会の全国大会の環境教育メッセ、というブースで学大小金井中の生徒が嵐山での植生調査の結果を報告しましたので、参加した生徒の感想を2回に分けてご紹介します。

今までの活動は主に中高生と会話しながら進めてきたので、今回このような形で大人の方々に様々な意見をもらえたことが今後も活動していく上で良い刺激となった。特に印象深かったのは、今回調べた「森の間伐作業による植物の変化」を踏まえた上でその場所の土壌を調査することでさらに関連づけることができるという意見をいただいたことだ。調査では森に入る光の変化を見てきたため上を向くことが多かったが、土を見るという新たな視点を得られた。また、他のブースを見ることで同じような活動をもっと広い範囲で行っている団体の方の話の聞いたり、普段身近にある商品の会社の方々が環境に関する様々な活動をしていることを知ることができたりと、これからの活動の参考にできるような貴重な知識を得ることができた。今回の経験を次の活動へと発展させてより良い活動をしていきたいと思った。

永田 桃夏 (東京学芸大学附属小金井中学3年)

環境を主軸とした世代の違う人々が参加する「日本環境教育学会」の中に私達は足を踏み入れた。私が想像していた緩い世界ではなかった。実際は、専門分野を各自で持つ、賢明な人々で溢れていた。ギャロップ、林床、潜在種という言葉が常識のように使う大人達へ、私達はこんなちっぽけな事しか言えないのかと、染み染み感じた。私達の研究へ「もっと調査対象を広げたら?」「長い年月で繰り返し比較てみたらどう?」「希少種が出たら面白いよね」と、改善やアドバイスをくださる方が多くいらっしゃって、ポスター発表は一方的ではなく、相互に高め合えるコミュニケーションなのだと感じた。そして、内容向上への意識が高まった。

この学会を通し、私の世界が広がった。新しい考えに触れた。私の未熟さを感じた。今回の学会は終わったが、そんな今が私のスタートだと思う。機会があれば、もう一度出直して、成長した姿で発表したいと思う。

横井 里奈 (東京学芸大学附属小金井中学3年)

【緑のダム20年史】

今月より不定期ですが、本会顧問で緑のダムの創立の中心的役割を果たした石村の20年を振り返るコラムを始めます。ぜひご期待ください。

会の運営を川田晃代表と監事を含む役員の皆さんにお願いしてはや1年を経過します。誰となく私の在任中の活動経緯補足が持ち上がって石原さん他から振り返り案件としての宿題が（取り敢えずは以下）問われています。

1. FSC認証取得のキッカケ、意義と成果、断念の理由と影響
2. 森林所有者（山主さん）や地域住民の相互理解・協力関係の構築
3. 行政や研究者・専門家との連携の在り方
4. 活動の継続と多様なメンバー構成が出来上がる仕組み
5. 森に関する知識・技術の身につけ方
6. 森への女性の参加
7. 社会への発信と外部からの援助獲得

まず、「FSC認証取得のキッカケ、意義と成果、断念の理由と影響」から始めます。

1998年3月に森の異常さに気づき同年4月29日（祭・緑の日）の新聞紙上にWWFジャパンが（世界森林保護基金日本委員会）「森林の危機」なる

意見広告を出しており早速、連休明けの5月7日に自然保護室の前沢英士室長を訪ねました。

詳しく説明を受けて当時、世界で780か所ほどあるFSC認証林があるが日本には未だないと言う事でした。前沢氏は「貴方が知ったからには貴方が認証取得に挑戦すれば良いのです。森林活動の取り組んでいる森づくりフォーラムの園田安男さんを紹介しましょう」という事で認証取得に向けて動き始めました。

園田さんの協力の承諾を得た続きに林野庁の受付でこれを指導して頂ける方を誰か探して欲しいと訪ねたのが当時、首席研究企画官の桜井尚武先生でした。訪問趣旨を話したら「うん、その話なら・・・」と身を乗り出して熱心にアドバイスを下さいました。

偶然にも最初に森林荒廃に気付いた森の所有者・佐藤市重さんは一緒に「汚染浮遊粉塵・建材有害除去機：空気清浄装置」の普及に取り組んでいた潮田俊二さんが、佐藤さんの親戚で、彼を介して入山を申し入れ、快諾を得て最初に見た荒廃林の整備に入ったのが同年11月20日（第3日曜日）でした。活動名を「与瀬・貝沢の森」と名付けました。

石村黄仁（本会、顧問）

NPO法人

緑のダム北相模

名称：特定非営利活動法人 緑のダム北相模

現地事務局：〒252-0172 相模原市緑区与瀬本町12 かどや食堂内

発行人：NPO緑のダム北相模

支援団体：セブン-イレブン記念財団

積水ハウスマッチングプログラム、国土緑化推進機構

パタゴニア環境助成

協働団体：神奈川県、相模原市、麻布大学、マルモ出版、

東京学芸大学環境教育研究センター、

（社）さがみ湖 森・モノづくり研究所、ウッドバンク株

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前に集合です。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴 成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食、第3日曜は汁物が提供されますので自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランティア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。